氏　　名	立石　和也
学位（専攻分野）	博　士（医学）
学 位 記 番 号	千大院医薬博甲第医１６４９号
学位記授与の日付	平成３１年３月３１日
学位記授与の要件	学位規則第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	Safety and usefulness of acetylcholine provocation test in patients with no culprit lesion on emergency coronary angiography （緊急冠動脈造影検査において責任病変が存在しない患者におけるアセチルコリン負荷試験の安全性と有効性）
論 文 審 査 委 員	（主査）教　授　　織田　成人 （副査）教　授　　宇野　隆　　教　授　　松宮　護郎

論　文　内　容　の　要　旨

【目的】

急性冠症候群が疑われ緊急冠動脈造影検査を施行するも有意な冠動脈病変がみられなかった患者に対して、検査中に続けて冠攣縮性狭心症を診断するためのアセチルコリン負荷試験を行うことについての安全性、有効性は未だ確立されていない。今回我々は待機的な症例と比較し緊急で施行するアセチルコリン負荷試験の安全性、有効性の検討を行った。

【方法】

2012年6月から2017年6月までの期間に当院で施行したアセチルコリン負荷試験の患者のうち、心肺停止蘇生後の患者を除外した 529 名に対して後ろ向きに解析を行った。緊急冠動脈造影検査直後に施行した群、待機的に施行した群に分けそれぞれの検査陽性率、周術期の合併症の頻度につき調べた。

【結果・考察】

緊急冠動脈造影検査に引き続きアセチルコリン負荷試験を施行した84例と待機的に施行した445 例においてアセチルコリン負荷試験の陽性率は同等(50% vs. 49%, p=0.81)であり、周術期の合併症も同等(1.2% vs. 1.3%, p=1.00)であった。

【結論】

緊急冠動脈造影検査に引き続き施行するアセチルコリン負荷試験は待機的に施行する場合と比較し安全性、陽性率ともに同等の結果となった。今後これらの患者に対してアセチルコリン負荷試験を積極的に施行することで冠攣縮性狭心症の診断、加療に役立つと考えられる。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、急性冠症候群に対して緊急冠動脈造影を施行するも責任病変が明らかでない患者に対して、同時に冠攣縮性狭心症診断のためのアセチルコリン負荷試験を行うことの有効性・安全性を、待機的に施行した患者と比較検討したものである。緊急冠動脈造影検査中にアセチルコリン負荷試験を施行した 84 例と、待機的に同試験を施行した 445 例において、試験陽性率及び合併症を比較した。その結果、負荷試験の陽性率は両群で同等で約半数であり、合併症に関してもそれぞれ 1.2%、1.3%と同等であった。この結果から、緊急冠動脈造影時に同時に施行するアセチルコリン負荷試験は、待機的に施行する場合と同等の診断率で、安全に施行できることが明らかになった。従来、緊急冠動脈造影時のアセチルコリン負荷試験はガイドラインでは推奨されておらず、必要な場合は急性期を過ぎてから行う事が推奨されていた。しかし本研究により、緊急血管造影時におけるアセチルコリン負荷試験は安全であり、同時に行う事で再度待機的に行うことによる医療費の増加や、合併症リスクの低減に役立つと考えられ、価値ある業績と認められた。